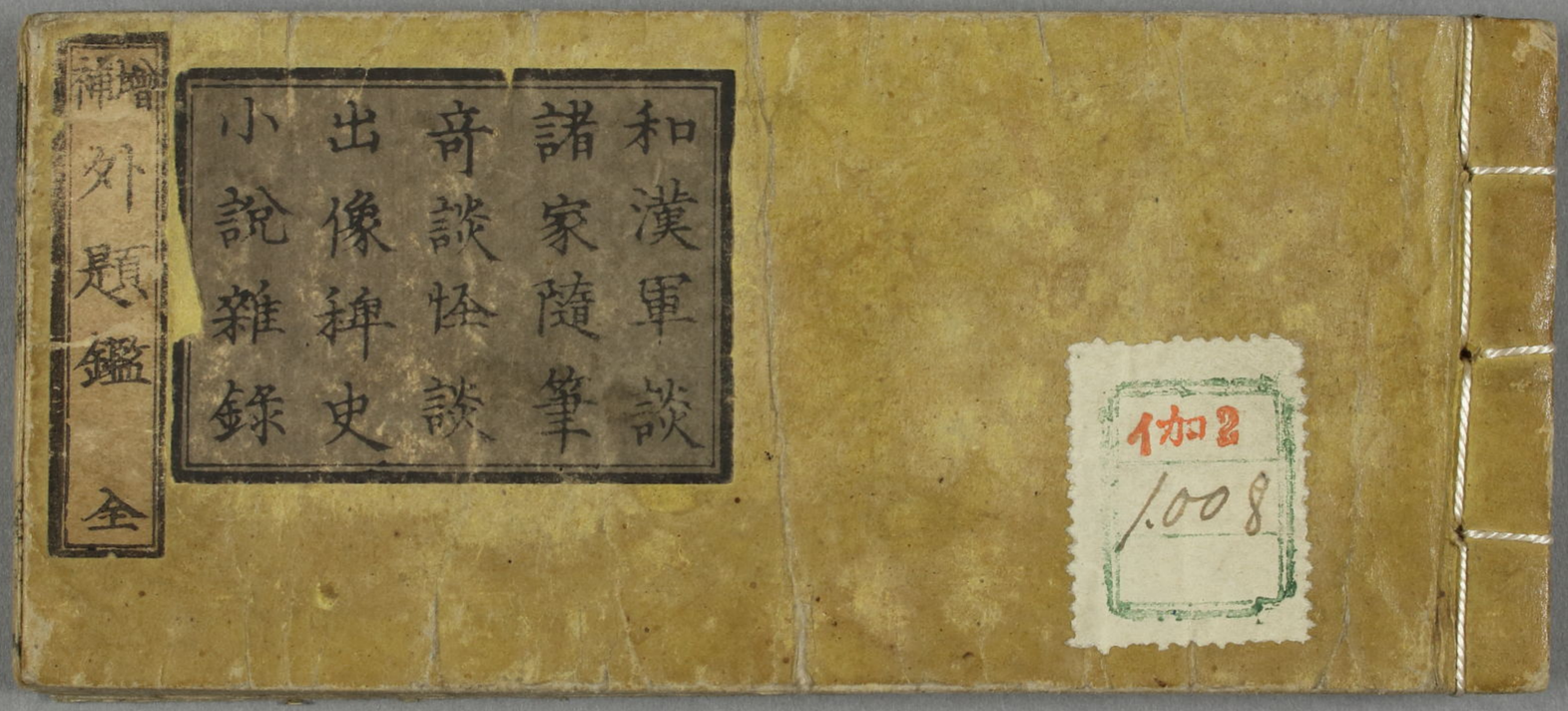


伽2
1.008

外題鑑

文溪堂藏

加賀藩 1008

文溪堂外題鑑序

慶元而降文雅盛旺、稗史小説家著戸作、浩瀚繁富不堪車載、書僧坊間各刹其利、利布開雕日蓄月積、豈啻萬億讀者茫乎不知津涯、故寛文十一年、平安書肆山田市郎兵衛、編著書籍目録三巻、詳記刊行之書目、是為近世刻書目之始矣、自是而降、遠則寺嶋宗意、和版書籍考、中村冨平、辨疑書目、近則木邨孔恭、羣書提要、尾崎嘉羣書一覽等、皆倚之而後作焉、書肆又繼其跡者、延寶三年毛利大八刊書籍題林目録大全三巻、貞享三年無名氏、改正廣益書籍

目錄三卷、元祿初年西村市郎右衛門、增補書籍目錄三卷、全五年、八尾市兵衛、廣益書籍目錄大全五卷、今坊間所謂五目錄者是也、全七年江戸松村清兵衛、新撰書籍目錄三卷、全就無名氏改正目錄、刪補前後換其名題、重刊之者、素不足以備一家、寶永三年平安永田調兵衛、增益書籍目錄六卷、分別四庫以國字四十七音、便其搜索所謂六目錄者是也、正德五年江戸無名氏、書籍目錄大全六卷、全就永田增益目錄、改其體製、以為區別、竊刊之者、亦不足以備一家、而間有補其遺、正其

誤者、不敢謂無所見矣、享保十四年文軒柴橋、新書籍目錄四卷、所謂四目錄者是也、又寶曆四年、新增書籍目錄三卷、所謂前三目錄者是也、明和七年武村新兵衛、大增書籍目錄三卷、所謂後三目錄者是也、文化中大坂書肆某等、採摭所謂五六三四等之目錄、稍加點竄、飾餙為編、題曰古今書籍目錄大全、無雜蔓蕪、雖不足觀、以其舉在于近、盛行于世、博雅之士、或得寓目於此、至他目錄、歷世已遠、版罹火災、或少流傳、知其名題者已尠矣、而況於搜索其書、愛玩之者乎、余嚮與冠山源公談

及此事、公有意於博採慶元以降諸家之遺編而作為目錄、使余與預其纂集之任、業已起稿、悉標其舉、半出於余之贊成、五換葛裘、以能成編、為二十卷、題曰延世藝文志、其收輯之功可謂勤矣、雖然公之意、全在儒雅文藻、不在雜說叢話、其所記載僅止漢字者、以國字記者、概除去之、識者皆惜其偏矣、余故欲補其遺、專以以國字記者為之主、醇疵併收、佳惡無存、使觀者擇之、三經螢雪、以能為編、為三十卷、題曰津逮書目、藏之篋笥、時加整葺、將以完備之、然聞見狹隘、不能及延世稗史小說出

像話本雜說叢話等、其稿本雖甲午火、無有孑遺、固雖不足以備大方君子之觀、今而思之、不能無憾、余有再輯之志、未果、今得岡田生之書讀之、自明和中六十年來、自稗說叢話至雜劇院本、上梨棗者、不論短簡與長編、標其書目、詳其旨趣、解題提要、無所不備、其疏釋之勞、可謂勤矣、生之意全在包羅巨細、不在辨別佳惡、故至於尋常著述未越羣流者、流傳既舊、不忍廢棄之、姑準諸家著錄之例、併存其目、俾世之好羣籍者、知其梗槩矣、嗚呼、書儈貪利、偷欲之徒耳、然用力於藝文如此、好古之

士豈不嘉尚乎、生開肆於城東小傳馬街、舗曰文溪堂、其所雕刻、近人之著述鏤版儲藏以百而數、其人頗有膽氣、一龍一蛇、與時俱化、故能其生計之盛、冠于書肆中云、

天保十年己亥相月良日

琴臺老人東條耕題

叙

茲ハ東都の書林二世文溪堂主人ニ請の書籍を周刻せ製本ホ業ハ

ナ新事ハ諸ハ猶世ハ稀ホ奇ナ珍書を探り人

ホ無ある所の心ハ必ず書ハし

或ハ持ハ上ハ是を江ハ別て

出像稗史物の本紙墨くに

出情ハ世ハ所藏の版本を

ナ〻ギ三都の新著も漏

事なく揚くゝを多欲を慎め
依て諸国の得意尽き信も
安きを思ひ年来心を用ひて其
業繁冗高の人こゝに有の益乃
書籍もこゝに紙を用ひ先代
の志を継で物の乏きの類稽
を博愛一般細々再販も
図らずく其美毎の意味
を要記し程史好の記憶を
助く此故に長編大部の物
の如き千里に懐中させく

衆人娯楽すべし凡此小冊
を貯へ作て和漢の軍記
萬巻の雑書稗史常に座
右に有べし僕文漢共に浅
氏の丹心を感悦の余り私
筆を補助加え校訂の
全本とせり十方遺書の諸
君達書賈文漢共に遠
書を撰集する苦心貴意
の為に忠信を尽て雇賃
永久費益の愛顧あるを

たまへるものなり

于時天保九年戊戌
仲秋吉辰

東都　蓮池菴

教訓老人　鵠鶴貞高

蓮池菴　倉龍春張

第一の序文猶此类中に漏さるを遺かすを幸年年ごとに山陰の新著も追ごとに補刻せ且後編まいり中形人情滑稽まで委くとりてをきよ發行あるべきものなり

撰者　文溪堂琴秀誌

○軍記の部

前太平記圖會　全六冊

人皇六十六代醍醐帝延喜七年迄後鳥羽院の治世まで二百四十余年の間武將の子孫王經基を最初とし源の姓賜はるを源平両家の軍事奇談をくわしく記して画を加へたり

保元平治圖會　全十卷

七十七代後白河院の御宇美福門院の御作行幸崇德新院の恨みにより天下大乱となるの始末成ることくわしくホこまを記して平家の勢ひ盛んなるとかとなりて頼朝公を伊豆の國に配流まで也

源平盛衰記圖會　全六冊

二條院應保年中より安德帝の壽永の頃まで凡そ二十余年の間の支藏ども悉く記せり

義經勲功圖會　前五冊　後五冊

牛若丸と申せし時よりそのかたちあらそてくらま山ゝ登り叡術とまあらゆる後に鬼一法眼の軍法城うけて一代の功名かゝるときはまさに欲ゝしく画解とあせえたるのせり

義仲勲功圖會　前後十卷

木曾義仲ハ平家を討ゝ源家の愁眉をひらくゝ大功実ハ頼朝義經の功ゆまされりゝいるゝ頼朝の奸心ゆよりて其盛衰短くハさるとゝ旭將軍の威名高き一代の功をとゝまくゝ

繪入鎌倉太平記　前後十二卷

北条家執權職九代の間の治乱興廢ゝ泰時の仁政高時の暴悪をとゝまくゝ記すり

星月夜頭晦録　當時燒板

頼朝公三代の間の君臣の得失かゝはゝらの事跡をとゝまくゝ

繪本和田軍記　前後十二冊

和田の義盛ハ鎌倉四立の功臣にて その族九十三騎忠烈ふるき人ゝあり 英名をとゝまくゝ画解とあせえたるのせ

繪本曽我物語　全十冊

祐成時宗ゝ敵討をとゝまくゝ

鎌倉新語　初編　五冊
星月夜と同じものがたりあり

繪本平泉實記　前後　十二卷
頼朝奥州征伐の事をとりあつかくあり

太平記圖會　初編八卷
人皇九十五代後醍醐天皇乃即位より九十九代後光嚴院の治世まで凡四十余年の間忠臣孝子の傳をも加へらるゝ軍記ゆゑ本朝無双の名記あり

繪本楠公記　三編揃　三十卷
日本武略の第一智仁勇の名將楠正成の忠烈奇軍太平記ゆゑ

しるしとなすべしー

楠正行戰功圖會　前後　十一冊
正成の男正行父の遺訓を守りて南朝の忠臣盡し軍畧奇兵をもつて足利勢をゆぶり戰功美談いと多き故あらためて集録して圖繪を加へたり

楠二代軍物語　全五冊
繪解にして奚ゆえ價も下直なれば進物などに

繪本應仁記　初二三まで　十五冊出来
足利將軍義政公政事のたとへ　應仁の大乱義昭將軍信長ハ天下を奪ハんとの

まで百余年の争戰を志る人

高井蘭山輯

江戸　溪齋英泉圖

妙見感應　清正真傳記　全六冊

名君あの清正公の幼立より一代の武功を圖繪とも

繪本甲越軍記　三編揃　三十六卷

甲越両國の智勇を競ふ古今無双の軍書あり

繪本菊地軍記　前後十冊

九州の名家菊地家の武功をつゝしるしたる

大内多々羅軍記　全六冊

周防山口の大内家の軍記あり

但一作王物語あり

太田道灌雄飛録　全六冊

一代の武功をつゝしるして繪入物がたりとし

繪本南総里見軍記　全十卷

もとの書八里見氏の起原上野の國ある里見村の由来より始めて代々の武功安房上総下総の三國に猛勇の旗下をつゝ五十余箇城の大守と仰がれ関東に美名高く仁を施し義をとげ忠臣孝子を招くの美談凡八州の名所古跡里見家にゆかりある所ならざるなし

中興の元祖義實の德行いよ〳〵拾守なして後年鳥の甚至の城の合戰北条氏と爭ひし虚実且小田原の

なめ小世を秩らま一ー武藏の諸士と
ゆれ〻ゝ力を戮せる義戰をんと大田
道灌の子孫太田源吾同源六の
勇力里見氏と合体し元小田原
勢を打破るの功戰數代連綿とつゞ
けて事實を記すのみ

東陽齋主人輯録

復仇 并 忠誠實録の部

繪本忠臣藏　前後二十冊

四十七人の義士の傳と諸書より
あつめて物語あり

繪本雪鏡譚　全十二卷

加賀見山の實録と國諸士の
美悪をあらはす小記也

繪本金花譚　全十二冊

頼兼ゆ一郭通ひ文治高尾の
をとめ一政岡の忠義又の悪人
仁木弾正の奸智ホとゞまらぬつゞ
て武士の用心とあるべきものあり

繪本霊驗記　全十冊

共山
毛谷村六助仇討のかたり

繪本伊賀越　全七冊
渡邊數馬唐木政左衛門の助太刀あて沢井又五郎とたゝかひ大勢の仇を討めぐりあ

忠孝美善録　前後十冊
伊賀越の後日ともふぐき仇討あ

繪本二島英雄記　全十冊

繪本荒川仁勇傳　全十冊

同復仇孝勇譚　全八冊

同誠忠傳　全十冊

同則定仁勇傳　全八冊

同白石噺　全六冊

繪本神靈記　全十冊
金毘羅田宮坊太郎が金比羅のヨ灵驗ふて大敵を討るめぐり

繪本浅草靈驗記　全十冊
世にいひはやくる乙川の血なまのがり

繪本箱根靈驗記　全六冊
世俗いざりの仇討といひはやふ

繪本亀山話　全十冊
世ゆハ石井明道士とも名ぜくちかり

繪本合邦辻　全十冊
加州高橋氏の後仇美談あり

茶店墨江草紙　全九冊
殿下茶屋の繪本あり

同會誓松の雪　全七冊

西國順礼幼婦孝義録　全十冊

繪本雙忠録　全十冊

豪傑勲功録　全十冊

繪本顯勇録　全十冊

新編 稗史之部

飛田匠物語　六樹園大人著　葛飾北齋翁画　全六冊

世の人口に傳りくる左甚五郎の故由故思ひ出せて番匠の奇巧人の命と救ひまこと唐國の人と智巧くらべて勝まさる業と感せしめ其外大工の故実にいるまでくはしく記し或いむかしの國竹芝の故事更科日記の文雅ふまえ奇談をどすべて珍しきおもしろき綴らまさりこのあとこ本ハ倭文とあらんかぎりとも

東嫩錦　小枝繁著　全五冊

こまこ東の仇討ふて多く実録ふりまこれば作らまさるいつもあとこ

りんとかるた　古風そめ人情とこまやかれせり

双蝶々白糸草紙　全五冊　苟藥亭作

敵討松山話　全六冊　立川焉馬作

近江縣物語　全六冊　六樹園著

繪本妹背山　全六冊　振鷺亭作

田村物語　全六冊　川上老人作

千代能七変化物がたり　全五冊　振鷺亭作

俊德丸　全五冊　同作

月宵鄙物語　前後十冊　真顔大人作

楓久松山物語　全五冊　馬琴作

勢田橋龍女本地　全三冊　種彦作

忠孝連理片袖　全五冊　一九作

長柄長者鶯塚　全六冊　鬼卵作

松王物語　全六冊　小枝繁作

侘馬樂奇談　全六冊　同作

天橋立　全五冊　一九作

金花夕映　全五冊　谷峩作

自来也物語　前後十一卷　鬼武作

漂注その雪　全五冊　馬琴作

石言遺郷　曲亭主人作　全六冊

遠江の國佐夜の中山ふるとゝいふある夜法石のことゝ式種と〜て菊川の里の奇談あんど良まふあり〜ろき物ぐろあり

柳の糸　小枝繁作　全五冊

新累解脱物語　馬琴作　全五冊

斯波遠説　七長臣　谷峩作　全六冊

窓蛍餘談　琴魚作　全六冊

小櫻姫　前編五巻　京傳作

小櫻姫　後編五巻　琴魚作

前後ともよく揃ふてれりろ〜

國字鶺物語　荀藥亭長根作　葛飾北齋画　全五巻

頼政鵺ど退治〜ら以前のわれ高くあのそ鵺によりて種々の奇談ど新に説まる因果物ぐろ

さすが狂歌の大人ど戯作者の及ばぬ文章一家の雅風あのぐろ

不視ゆる草紙あり惜いろる敗木焼失の後捲巻ど看ごまれろり

菖蒲草檐五月雨　文東陳人著編　全三冊

六波羅落ど發端として作る物ぐろ此敗木も今ハあ〜

千代物語　前後十冊

百合若埜居鷹　萬亭作　全五冊

世ふ諺百合若十日眠の物ぐろ

松風村雨物語　前後十巻　文東陳人作　歌川國直画　溪齋英泉画

行平朝臣丙幡の住吉須磨乃浦ふくうの事跡古今にもゝろき奇談なり

全五冊

嫩髻蛇物語　全亭主人作　溪齋英泉画

全五冊

金鈴橘草紙　同作　同画

全五冊

風狸傳　柳亭種彦校

全五冊

忠孝顯名録

全六冊

放下僧物語

全四冊

車僧物語

全五冊

雙名傳

全五冊

花若丸一代記

全四冊

泉近衡物語　福地鬼外著

全五卷

一名小大嶋軍記ともいふそのあとに向一隊別ありてなり

繪本沉香亭　全十卷

新田義助沉香亭に今の奇談巻の首に奇術をたくみたるもの異説後ふく南朝合戰のなりむね記を記して常のよくこ本とかりて楽しべ

忠孝比玉傳

全六卷

古實今物語

全五冊

坂東忠義傳

全九冊

浮牡丹全傳　全四卷
山東京傳著　歌川豊國画

浮牡丹香爐の由来山路籟渡しの危談名にもあゝ京傳先生妙作画もまた元祖豊國の筆ゆゑよき本流行よめの製本その頃評判の草紙ゆゑ板木焼失して今いゝ絶えり

巫山夢　全五冊
十返舍一九作

八文字屋風の艶ごとを一流の口調よこ本ゆゑ例の滑稽を兼たり

初夢富士見曽我　全三冊
元祖　焉馬作

歌舞伎年代記　全
元祖　焉馬撰集

松井物語　全三冊
赤城山人作

日本水滸傳　全五卷
綾足大人著

八百屋七　胡蝶夢　全五卷

明月清談　全五卷

寝覚雙子故郷錦　全五卷

鉢被姫物語　全五卷

出雲物語　全五卷

東雄操物語　全五卷

東雄過糸筋　全五卷

三嶋小女郎　麓の花　全五卷

復仇武藏鐙　全五卷

五人振袖　全六巻
白鳥奇縁　全六巻
河内国七嶋木綿　全五巻
薄雲奇譚　全五巻
幸物語　全六巻
白玉草紙　全六巻
新編熊坂物語　全五巻
謡曲春栄物語　全五巻
蟹猿奇談　全五巻
筒井清水　全六巻

在原草紙　全五巻
櫻木草紙　全五巻
鬼壊傳　全五巻
千貫樋　全六冊
小説江登紫　同
金鱗化粧櫻　同
蛍狩宇治紀聞　同
繪本美鳥林　同
會稽三浦譽　同
寄木草紙　前後十巻

譽一廻箭	全七冊
陸奥の幸助 夢の浮橋	前後八冊
平井の権八 妹背語	全五巻
繪本打出濵	同
繪本綴の錦	同
駿河若全傳 逆櫓松	全六冊
霧書替文章	全五冊
那智の白糸	同
奇談青葉笛	全六冊
繪本伊吹物語	全五冊
繪本遠山日記	同
雲井物語	全五巻
手引の糸	全六巻
弥生櫻	同
雙三味線	全五冊
繪本檀二葉	全六冊
駿河舞全傳	同
繪本簀草紙	同
金谷金五郎	全五冊
玉迺搓櫛	同

蝶の夢花之曙　全六冊

朝顔日記　前五冊 後五冊

駒沢治郎左衛門の傳ずまを述へ異朝の小説翻案絵入り本中の冠とすべきものなり芝屋司馬の遺稿と浪花の作者柳浪大人の補ひ綴ぶ評判絵本なり

室の八嶋　全八巻

怪猫の美人と化したる物語ありて東の作者の及ざる妙作なり

浪花侠夫傳　全六冊

男伊達のあらましを綴ぶ

あらた新奇珍説いと多し

盈石皿山の記　全五巻

紅皿欠皿のこと紙あり是ハあらく作らまさり　曲亭主人作

越路章　前後十二巻

嵐山花月奇談　前後十冊

復讐安達原　全六冊

峯乃ふぐま　全六巻

北野の霊験　二葉梅　全六冊

孝子嫩物語　全五巻

石堂丸川首物語　全五冊

蜻蛉の巻　全六巻

若葉榮　全六冊

愛護の若　全五卷
嶋川太平犬神物語　同
繪本口之碑　全四卷
我儘草紙　全五冊
玉照物語　同
堪談堤の菴　同
阿波の鳴戸　同
和漢の染分　同
繪本浪花男　同
繪本根笹雪　全六冊

檀風物語　全五卷
復仇尼城錦　同
西海浪間月　同
鳥邊山岩くべの糸　同
竹乃伏見　全六冊
三山草紙　全五卷
復讐千丈松　同
大和物語　同
忠臣山賤傳　全六冊
琴松譚　同

文化新板 宗像暦 全七冊
浄瑠璃姫物語 同
芦茅草紙 全八冊
庚申談 全五冊
観音守護宝剱 同
鏡山烈女功 同
旭立帯 同
復讐親子塚 全六冊
松蔭草紙 全五巻
以呂波草紙 同

繪本松栄花 全六巻
同 夜船譚 同
同 茨の露 同
再開高臺梅 同
二枚繪草紙 同
淀屋形金鶏新話 前後十巻
女熊阪膳校草紙 全五冊
雨夜傘 全十巻
都鄙物語 全五冊
繪本賢女鑑 同

發功譚　全六冊
名月夜話　同
春夏秋冬四季物語　前後十冊
竹鉄太郎犬猫奇談　全五卷
復仇二見浦　全十冊
同　越女傳　全十卷
本朝悪狐傳　全十冊
梅川忠兵衛赤縄奇縁　全六冊
女水滸傳　同
二個拵言傳内笛摺　全五冊

小野八十島蔭　全十冊
繪本物草太郎　同
同　奇縁傳　同
同　石金譚　同
仝傳龍月草　全六卷
道成寺鐘ノ記　同
長屋門月桂新話　前後十二冊
世継草紙　前後十卷
四谷怪談　全五冊
梅菊新話　全六冊

野路の玉川　全九冊

さらさのしらかち染　全五冊

双蝶記　山東京傳著　全十卷

この草紙いと面白く古今無類の姉妹ぶりなり画の元祖豊國の筆ゆゑ彫刻もよろしかるべし製本もくぶめぶし

白狐傳　玉山画作　全十冊

一名あやつり物語

近頃目の覚るる名画作なり東あり年の紙もあるべし草紙なり

山桝太夫　全五卷

後編　今調録　谷峩作　全六卷

月氷奇縁　馬琴作　全五冊

三七會傳　南柯夢　曲亭馬琴作　葛飾北齋画　全六卷

筒井順照柿を切るとて木精の怪より半七三勝の奇縁を説古今人情の意をたくし哀れおかしろき物語なり

南柯後記　同作　同画　全八卷

南柯の夢の継作なり前編ともまさる奇談とりべし

繪本料草紙　本丁庵三馬著　全五冊

あまたの奇談をあつめてめづらしかるべし

常夏草紙　馬琴作　全六冊

お夏清十郎のあやぐり

文学上人行状記　橋供養　小枝繁作　全五冊

あまたの盛遠が愛心の記なり

松浦情史　秋七種　全六冊　馬琴作
お深久松の物がたり

刀筆青砥石文　全八冊　馬琴作

摸凌案の奇談　全三冊　柳亭種彦作

浅間嶽面影草紙

後編　執筆　全五冊

種彦先生の新案奇代物語　全五冊　三馬著

阿古義物語　全五巻　春水著

同　後編　全六巻

弁慶異傳　全五巻　英泉画

為永春水門人　柳魚作

こゝ春水の種あるべし

梅花氷烈　山東京傳作　全四冊

後編　梅花春水　為永春水作　全四冊

前編發市の後数十年後編と継て金傳とあり実小氷烈春水の如く鮮和げうの看官これも由矢衛の物語とゝゝ

隅田川梅柳新書　曲亭馬琴作　全六冊

梅若松若の事跡を種とすれども名にしゝ作者の新書あて岸の柳水梅が香をそへて筆の綾錦文章清きゝ隅田川の景色もゑゆる物語

歌討裏見葛葉　全五冊　曲亭主人作

三國一夜物語　全五冊　曲亭主人作

冨士と浅間の煙のあらそ一夜乃中に板木の焼失今此敗世に絶うし

近世怪談霜夜星　柳亭主人作　全五冊

世の人々の言傳ふ四谷怪談の繪入ゆえ芝居ふするも山本の著述よりぞおこりあり

勸善常世物語　曲亭主人作　全五冊

最明寺殿雪の段の旨ろ〜ゆえ

安積沼　山東京傳作　全五冊

小幡小平次の怪談ろり

雲絶間雨夜月　曲亭馬琴作　全六冊

鳥神法師の物語りゆえ孝子の傳を加えそなりろ〜

安方忠義傳　山東京傳著　全六卷

將門の自ゑ滝夜叉姫丹芝化の術は依て男士を招き父のころざしを継んとするいとまもきものらとろり

うぶんげ物語　山東京傳作　全六冊

雉枝鳩　曲亭馬琴作　全五冊

右のろ〜ゆえ相同じ本ろ作るまゝ両書とも

ありてなりろ〜

鷲の之談　山東京傳作　全五冊

四天王　曲亭主人作　前後十卷

系櫻春蝶奇緣　馬琴作　全八冊

旬殿實々記　曲亭主人作　前後卜卷

蟬丸傳記　半月夜話　白頭子柳亭作　前後十卷

その草紙へ作ゆえ前後相合て看に倦なし〜

松浦佐用姫石魂録　前後全本十二冊
曲亭主人作
瀬川采女才女於菊が傳奇翻案
なるべしかりろきをゆゑ多〳〵

美濃八丈奇談　全七冊
古衣　馬琴作
おなじ人才三の名をもちひしわく〳〵ふ
説いづれ物ぐるをもじめふ齋藤道
三の傳をあつめ一古今無類の奇
談なり

さくら姫　全五冊
山東京傳作
おなじ婦女子の耳にふれる清玄の
奇談ゆゑ一部の計向古今あく〳〵ふ
の見妙作世小繪入ちゑ本流行
なるも此物語を第一とかぞへ一なり

忠臣水滸傳　前後十卷
山東菴著

忠臣藏を水滸傳のなりむきなぞ
ふて其文章めづらふ一家の風
著りよくものかぞといとをん

假名手本後日文章　全五卷
元祖　北斎老人画　同　立川馬馬作
忠臣藏の後日ゆく〳〵古今の姫作殊
ふ一流の筆意あり

忠孝潮來武志　全五冊
右同作　同画
いとこぶしの唱歌めづらしき忠臣
孝子の物語馬馬老人一代の作とも
色〳〵

鉄手摺昔人偶　全五卷
柳亭種彦作　柳川重信画
おなじく一家の風とりく
綴りまる新計向山東人翁ゆも曲
亭大人ゆも似よくでもすぐる
珍書なり

皿皿郷談　馬琴作　全六冊

紅皿欠皿ものがたり

頼豪阿闍梨怪鼠傳　前後　十卷

著作堂馬琴作　葛飾北齋翁画

三井寺の阿闍梨頼豪が鼠とりし奇談より木曾義仲都落の因縁清水の冠者義高鼠の術を行ふの奇談猫間新太郎の復讐の辛苦烈士唐系の忠臣なんど古今に秀しものがたり

夢想兵衛胡蝶物語　前後　十卷

作者の博識わゝ見えし世界の嗚々理屈にかゝるゆゑ自然とわかるそさすが姻文百ゝび千度なりかゝれども常のよゝ

曲亭主人作

青砥藤綱摸淩案　初編　五卷

同　二編　全五冊

青砥左ヱ門最明寺の眼代にして評定衆の一位となり仁政を施し世を正し明徳慈善をすむる物語なり

稲妻表紙　山東京傳作　全六卷

稲妻のはしまり見るゝ不破の関その句を以て思ひよる不破と名古屋の物がたり実中新奇妙案の取合せよき却向ものが実にいとゞまのきゝゝゝ名紙草紙にこそ

本朝粋菩提　前後　十卷

この書は稲妻の後編にして名古屋小山三の後雙に一休大禪師の傳奇なり天下老和尚の活法佛

智力の道化諸書より撰このら
ばかるべし　山東廣主人作

濡燕拙傘雨談　前十後巻
曲亭主人校合
墨川亭雪麿作
柳川重信画

傘に花ぐ〳〵かそうよ濡燕とゆふ句に
よりて題さつけらるるかり色
彼京傳子の稲妻とかゝ〳〵こんさゝが
廿中衆の名古屋ゆきのねと燕の
らもめてあるこゝ世
級の山東の山ようも墨川の川ふまら
まく洗濯せゝを色ゐゝんろ

曠精奇談　全五冊

坂東奇説　濡衣草紙　苔藤亭著　全五冊

ゝの八弦きゝの珍説色がゐゝろ
焼失してすり巻世にまゝる〳〵

昔語質屋庫　曲亭馬琴作
勝川春亭画
全本五巻

繪入物語八例の戯作のまねわび
事跡を吉野の皇居にしゝ言葉の
蘭六田の里ゆ宝屋宝珠といふの在
し由を殺語とゐ其家元来好古の
癖わり好事のものゝ貴ゆ
貸を法業とせり或夜主人蔵の中
の物音をゆつけて
ゝ
ひの元の段階子きゝ
ゝと息もとして伺ひ者ゝ六種
の道具質の欝ゝる精美ゆ八
ゝ名ゝ刀の上ゝとゝゝる其中
めして博学ゆ元ゝる先生ゝ
ゝん延喜の年号をゝ
の精魂ゝりこゝ
らゝくゝの夜ゝ
のゝ人ゝを色を評注ゝる役ゝ

曲亭翁の滑稽さて孔子の
多くのむつかしき異物を泥せ
いと数くの品々別くの古物に三
国を経めぐりて果は那須越に終りし
とゝ人丑津前の狐の皮衣まく漢
末の軍師に孔明の陣太鼓紀の名
竜が錦のふくゞ裂裝に前まくゝ大
磯の虎が法の品く源家の重宝友切
丸石堂丸が高野登りの御半ゑと其
名ゆゑ人く説ゆゑ古今未発の道
理を法くゝ古書のあやまり俚俗
のまどひ玄明らかゝ物ゆる替ゆ
うゞ一度この巻を印くゝ物ハ一
理によつく方丈を発明まるの教
えをうつるゞうゞ物の本で
このゝそよむとも用捨のこゝろえ少
なゝゝむとゝ書を信じてハ
ようまぬ中ゆゑのい年めの書を坐
師となのゝ方ゝ文学の才子
ともなるべしとゝ人

俊寛嶋物語

曲亭馬琴作
歌川豊廣画

前編 五冊
後編 五冊

平家世をとゝ二十年皇統を
蔑ろ下を苦しめ非道の行ひ
多くゝけるに公家武家ともに
憎みあゝと平族のことゝ
わゝゝと思ふ者もゝゝに新大
納言成親々の思ひ立に組ー平家
を傾けんとゝ人ゝ
その大将の列ゝて法勝寺の僧
行俊寛ゞ度量武家の人ゝ
さゝ如意ゞ嶽の山中鹿ゞ食の山荘
ゝ一味の
牛若丸ハ平家の密体をうゞハと
都ゝ登り如意ゞ山嶽の山中に
折ゝも平の清盛ハ如意山の滝を
るさんとて多くの同勢にかゝこれ御
所車を押のゞ折ゝも牛若丸ハ山の
上ゝ三見下ゝゝ目覚ゝき

平氏の行はるゝ清盛入道のあとび歩
行い院の徒幸に行はれ
と発して居る所へ義朝の旧将門
太郎正親といふの牛若の量量たる
めて力を合し大盤石を山の上より
投下して清盛の車をうち潰せさ
まで清盛はその車にゆらずして
必死を退き正親は打死しうつ
まとども牛若は大敵と切ぬぎ俊寛の
下部が途中に下して置さる長持の中
ふかくまとてそこもぞも鹿が谷の別荘
へかくまとあるにそ俊寛ホ對面の
奇談その文章のことやうふかりろ
きこと古今の作者こまやかなる
ゆ一見すく牛若が時勢を論ず俊寛
といさめ平家をうくんとまろうこと
こゝの先見明智その弁才に感じて
俊寛夫帝牛若娘の奪ひ合さんと
えるまぶり人情のふかむ尽しうつ
かて牛若は奥州へ下向し俊寛の訴

人の者あるホよりく事ゆゑ礼京の鬼
鬼の嶋へ流さる其子ゆゑの辛苦艱難
毒殺の孝心松の目の貞実さ俊寛の童
ゆゑ安王有王ゆゑ忠義あれむべく
かなしむべきのゆゑりのいと多くそきさ
俊寛が嶋の段ハ誠ホ奇代の舞尚ゆて
看官いさゝも曲亭翁の桟関と奈
すくとあるゆゑ後ホ牛若が再度の都
のわり白川の其海と戦ひて鬼一法眼に
谷みゆる怪の恋情虎の巻の和
書ひく鬼一との問答けゆも源家
の侍曹子九郎義経ともいとゝ聰
明英智のその風情ゆ作り物
ゆゑうとのやうにゆゑ丸で馬琴先生
の著しる繪本にあるゆゑ以て美談
別てこれの嶋めゆゑ以て美談
といふまべこれを第一の佳作とい
らざるホ八犬伝の長編をのけて
の俊寛嶋物語をとりつく後へ
最第一番の著編とのべ

荘蝶翁再遊外記　全五巻
曲亭馬琴大人作

此書は前ゆ流行し〻憂想兵衛胡蝶物語の続編よりして古今未聞の妙論奇説前板のかりろ絶ゆまされると百増倍の夢想兵衛の手ゆえりて

いよいよまもく世の珍き新郷を看んとき

その風俗を教訓を博識弁明の普く世東の人情小通ど和漢古人の学者といえども説ざる詮

穿に滑稽笑談自然と侮ハり

古事をもして今様の洒落ホロ

うる俊才文雅とホ再びわハ

荘惣翁ハく曲亭公羽の手を移

こる著作の粧妙ハ〻ハく賞紀

する競べのい皆ちらぐく巳

ホちをまりいろの丹誠の作と

いふともこの右ハい出がてーまとふ

深理醒俗の一大奇書ろるべ

のまてこゝの人ハ

孝薫功話　好文士傳　初輯　五冊
爲永春水作
溪齋英泉画

第二輯　全五巻
第三輯　全五巻
第四輯　全五巻
第五輯　全五巻

後花園帝の永享の頃南朝の古事に起原梅壽の好文ゲ吉野殿の前後論し梅上法師談国とめぐりて梅姓の五賢男士の奇功とをり淺の道淮ま吉く

古ま〻と招ゝめ河肥の城ゑ集る

の奇兆関東の古跡をゝ〻ゝく

さゝね又菅神の事ゝその神徳

利益をまゝ多く古戦場の

遺聞をゝ〻ゝてゝの持資君の文

武の徳沢天が下にかくとゝるきた

勇の士今美談ゝ〻ゝ

[illegible]の判[illegible]本
麗なのふ仕立一帙を三巻とし
画も当時の流行にて[illegible]という
うりされバとて近頃[illegible]
俚俗の人情をそのまゝにつゞりて艶
史のくゞひふ笑ひき拙き草紙の
[illegible]の中所の絵入[illegible]
でも看官の大いに推のべ[illegible]文
浅自在の曲亭が素[illegible]る牧作

曲亭馬琴作　中本三巻

[illegible]
あ[illegible]唐土の小説[illegible]
人目を驚ぎる珍書をさゞりて美
婦人の数多くべ[illegible]の雅
びの文章[illegible]
[illegible]これで前代後世[illegible]
[illegible]三冊ゝ[illegible]出版

長編大巻之部

小栗外傳　三編揃　全十八巻

小枝繁大人著　葛飾北齋画

説経祭文にまで名を[illegible]
栗の判官照天の姫の故事を
新に作なし物語なり

更科草紙　三編揃　全十五巻

栗枝亭鬼卯作

勇婦更科姫のことゝ山中嬰
助の傳尼子家の臣五十勇士の
奇談をあらわしたるなり

景清外傳　三編揃　全十五冊

小枝繁作　歌川國直画

悪七兵衛ゞ少年うの事を
くはしくしるし奇談なり

朝夷巡嶋記

馬琴作　豊廣画

初編　五卷
二編　同
三編　同
四編　同
五編　同
六編　同
七編　近刻

木曾殿義仲の敗軍より巴御前の忠誠貞烈ばさもあらんと思ふ曲亭翁の筆刀自任和国の義盛の館に巴が自害のつさ迄さ実に義仲の亂に出来たる婦人かぞあり自然にうかべる愁歎遺感さ亡の尼なんど世にいひ傳ふ人口ゆゑ叶ひて其意を尽さるいつもみづの如作とおぼふ着き人鳴呼なるべきの必らずばよませのよとよ

鎮西八郎為朝外傳　弓張月

馬琴作　北齋画

前編　六卷
後編　同
續編　同
拾遺　同
残編　同

全本三十卷

六条判官為義の八男冠者為朝の雄武乱暴ひて九州に下り菊池原の人令を威伏おく鎮西八郎と称する保元の乱に都に登て新院の味方にて軍略を用ら武無念の敗軍に猶大胆なり後八丈島に流され琉球國渡海するの珍説すべて故事に旧記ふよう為朝一代の行状いさゝかすゆゑ亦その宝玉ぬひ取り貞烈なんど尽しがたく凡よそ本の隨一なるべー

六六 太平記 岳亭作 英泉画

初編 五巻

二編 同

三編 同

太平記の中ふて水滸傳のあらまし
ふべきすぢを種とし三十六人の墨画
もつて水滸傳のあらましを太平記に
うたしる丹誠の作といふべし

俊傑神稲水滸傳 右同作 十五冊出来

ゆきとも盗賊の名をかりて水滸傳の
風をうつしてるものろき作なり

前口神見 新田功臣録 前後十巻

小枝繁老人作
葛飾北齋画圖

新田功臣録拾遺 全五冊

小枝繁老人稿
狂訓亭春水著

此書は新田義貞公の公達德壽丸
の生涯より南朝の天子に忠義の心
ふかく南帝一統の德世にあさんとひたす
に味方をかたらふの信義ふかく
佐まいする功臣ぞ或は貞女
節婦の百切千磨軍師幕中の才智
歌を賦るの詩許且左中將義貞朝
臣の老臣篠塚伊賀の入道石原が
再身強勇を頭し義を佐るの
美談万里小路藤房朝臣隱遁の
後神仙となり紫化真人となる
のちの神通義光の火難未然
よ察ひそその一黨を一旦山境へ
かくまさせ再度世にあらはし
足利勢を切ぶけ南帝を快い
ろくそまつの奇軍南朝追慕
の物がたりなり

相馬将門 總猿潜語 瀬川如皐作 狂訓亭校合 英泉画

初編五巻 二編五巻
三編五巻

○初編より後へ狂訓亭の門人
あり駒人柳魚が継作あり
将門の幼年より愚なりしより其母
北斗に祈て命を捨て将門を世に
出さんとする節操まこと其臣下
勇士の傳すべく發端の赴向
奇代なり

木曾義仲 鼎臣録 溪齋英泉画 瀬川如皐著 為永亭西校合

小松の内府重盛の二女櫻町中納言の
一條よりやとり入給ふ故事帯刀先
生義賢大倉谷の最期恵信太義平
の辛苦伯父と討の意味深長

駒王丸の出生實盛
めぐまれてうるの義忠其後木曾
の地に成長し今井樋口楯根井巴安
をもつて忠烈勇士の幼立伊勢桑宮
の乙女に分姿幼年より平家の動静
と伺ひ旅中の患苦次第に英勇豪
傑とあつめ竟に北國に旗を上るまで
後と謀ずして小事を大謀とせんの
奇談と多く爰にその大畧をも
尽しがたし

初編 五巻
二編 同
三編 同
四編 同
五編 近刻

伊勢新九郎大志傳 全十五冊 近刻
小田原北条宗雲が京都を浪人して諸
國を巡修行の奇談 為永作

開巻驚奇 俠客傳

馬琴作 英泉画

初集 五巻
二集 五巻
三集 五巻
四集 五巻

紫貫南朝の忠臣新田楠の一族なり今浮の後猶志なびまして足利の非義を恨み南帝補佐のためにとめびし甚難辛苦するの物語まさに楠氏の一奇女姑摩姫幼手にて古今にかぬ比稀なる才智勇烈男子にまさる行業九六姫の仙術すべく巻中の奇談未曾有の新趣向多くわりて実に巻を重て驚奇といふ外題ふわさりにさく作者の自讃といひつべし古より史よむ人の遺憾とする南朝忠臣の外傳あまたいと快し傳記なりし

近世説美少年録 馬琴編

初編 五冊
二編 同
三編 同
四編 同

山書ハ周防の大内家世を独立して大江ひ成ぬ嶽実ちとこの発端なりて大江ひ成ぬ嶽実信勇陶瀬十郎のお夏にまつわりて其ハ念世に悪頭ーてわやー紀年を半するのすべて物語の風をかえて八犬俠客のありむきとは大に異なるの善悪ハ一ハ美少年の所為ここ美少年書ハ福内果の乃理ーを尽くして悦ぶべきわり怨んむべく涙を催しまさに快然ーる栄花を視せわひ艶谷美蓑の婦人せいぐーて且婦に且貞ホいつまでも春情の動ずおとき場ます正然やて着官ーを改なる恩の段も備り誠に古今の奇談也

大内義隆十杉傳　為永春水著

初集　五卷
二集　同
三集　同
四集　同
五集　同

第六集　上帙　四卷
下帙　四卷

防州山口の大守大内分の家系にハあれど且大杉と代せざる徳行より杉といふ字を冠号する名氏の勇士十人十方に出身して文に富み武に長ずるのみ身をあげ山に崩すの剛勇わるびれ枝の果を身貫神前の妙手わるびれハ天文地利ハ建し亦ハ未然の吉凶を察する易術の神占十勇者得るる才覚多くまた十人に従ふ侠気の勇士ハかこより起りて牧十人終ハ周防大内家の招ハ應じ志をさて興運立身するの美談なり

第五編より作者前々の麁漏ハ恥く丹誠の著作制表本のみにも精を多くの佳紙上翔の新版なり

双玉傳　全十五冊

宮田南北著
歌川國直画

同　第二編　全五冊

松亭金水作
柳川重信画

雲州冨田の城主天子氏の由来始
め尼子と改むるの縁故を發端と
し細川政元の僭位によつて諸侯の
會盟にもの申さず九牛の命を佐け
る仁術によつて牛の字を号とし
る勇士集會して義人を補佐し
中國に威を震ひ四海に名を挙ぶ
の美談つゞき出板近刻に及ん
五編全部二十五巻ゆて満尾と

曲亭馬琴編次
柳川重信画

そもゝ安房上総の國主と聞えし
里見氏は清和源氏の嫡流八幡太
良義家朝臣の壮世里見治部少
輔俊基の嫡男義実より安房の国
主の元祖なり出書の比は室町
将軍義教公と鎌倉の持氏朝臣と
確執ありなほ後花園天皇の永享
十年二月十日持氏父子ともに誅
国家切腹わ〻まし後持氏の二男三
男春王安王の公達と結城の氏朝
すゝびまして義勇の人々ども
集め里見小栗の豪傑とまりふ
結城の城をもちかこめて永享十一
年の春より嘉吉元年四月まで籠
城三年にもなれば糧も矢種も尽る
より城兵ども〻打死せしまゝ
孫の為に義実の後妻を落さる人

ゆゑあり其中に里見又太郎義実は父季基の遺訓ふ者ぶひよせて城を居き相模の国三浦
ある夫取の入江小落知てそれより安
房にはさらんと心がけ龍の昇天する
を視て老臣元わ是を評して曰世
るべしとする才智小舟に乗て安房の
国へ渡るの發端まこと安房の国ゆハ
麻呂安西東條とゆふ三家の大名
あり此内より東條の姓を継し平郡
滝田の城主神餘光弘とゆふ大身な
の臣下山下氏の為に亡ぶ麻呂安西
山下とすでゆ里ハ伐の起らんとする
虚ふ乗じて里見主従竟ふ三家を
打亡ぶし頓て安房四郡をあぶへ
の美談をゆひとも其ゆへに
ようて里見の姫君房とゆふ犬ふ伴
るゆまを同国冨山ゆふの奇事役の
行者の神徳まこと玉梓とゆふ美人の怨
念ゆるすをゆの法術の業ゆ直ハ

ゆあくざる曲亭の妙文第一の巻
より四の巻の七回まで八日数八十余ク
目のゆをもて第八回より十六年後
の物語を説き義実の臣犬塚信乃
郎とゆふの伏姫の跡をあくゆ富山へ
いる路谷川まで金槌
大捕孝徳とゆふ者八房の犬ところ
を伏姫君を救ひまゐせんと飛道
具をなげうち冨山に日ゆ登るを以て
第五の巻の終とす初編ゆくき
ざるでも里見八犬士の名をてよ記
を知らしむ

犬山道節　乃松
犬塚信乃　同　志之
犬坂上毛　同　毛北
犬川荘作　同　額義
犬村大角　同　角太郎
犬飼現八　同　玄古
犬田沢五　同　沢吾　小文吾
犬江新兵衛　同　吉平

里見八犬傳　二輯　五巻

曲亭主人著
柳川重信画

この編一の巻に義実朝臣の夫人五平
子伏姫の身の上に安房ノ国府に病伏の
より義実夢中に役の行者の告を
かふむり亦其臣堀内蔵人貞行に異
人の告によりて東條ごろ出滝田に
あて主従奇異の思ひをなしひそか
富山にいる伏姫と山中にあ
あて法花経と日おとふぐ毛色
犬の為に身をけがさるべき事の春秋
を過し或日神童にあひて因果の
道理を感得ゐて陰陽の所為な
れとも法花経の功徳を主持
の怨念善果にあり里見の家を
さかんにしむべ八犬士出生のいわれ
をさとしまへの一段かなへ金槌大
浦がうつ島銃あて八房の犬命絶
落し伏姫も血をはき倒れ

浦後悔して自害ふちぶ
犬矢をさしてその
主従とふいうて姫君の自殺ゐふ
前後の條下ハまご古今にたた
めもあるき因縁因果の道理高
僧智識も不及明辯解説何ふ
ゝ親子の秘情を
やりふ亦賢将と才女の覺語ゐ
ちゝて聖ものづる應名志操ふ
昌の珠数八ツの玉八方にちりて八犬
士を後の世に現ぜ姫の最期且五十
子の方の病死大浦發心して、芳
とものハツの玉のゆくえ
て旅路へ第三の巻に
いうてふさび初編の一のまき
結城合戦のゆかりて里見と
同ぞく龍城ゐる鎌倉の忠臣
大塚匠作その子番作が結城を
落てゐる君をまくハとせ
ゐ毛美濃の國擂井の宿ゐ

両公達のは最期は親子言合さねどもこゝろざしはいとしくまそ金蓮寺とゝ寺の法場に京軍三百余人をつゝ白ゞ父匠作は討死まゞもその子番作は君の首をうばひ立のき木曾の夜長嶽とゝ山寺に籠り賊僧ところ華庵とゝる山寺に籠り賊僧ところ

まそ又ゝびけの妻子束をすゝび名のゝわゝの奇縁これこの子束は言かまゝら日ゝ君のれ為に結城の龍城まゝる井の丹藏直秀とゝ人の娘にてかの大塚信乃が母おやゝり子束子束はまゝうけゝて滝の川ゝる弁天へ日参して長禄元年ゝり同ゝく三年の九月すで一日もとゝまゝ夜中に参詣の路に小犬を伏せて伏姫の神霊とゝゞこれゝりゝのゝそ寛正元年七月戌の日に男子を生の因縁八犬士の一人大塚信乃とゝ

七ヶ月にいゝつく中やゝく顕はさて番作子束の夫婦は子育の為に男子を女子のごゝとくなりゝ名をも信乃とゝ名づけゝ番作子束が慈めて信濃の国夜長嶽の拓華庵に出会ゝる

その子を忘れずとゝ信濃の受領に乞ゝ後を寄くゝ

といゝりてゝに大塚氏を大塚を名ゝ

浪人とゝゝ三年の浪人中世話

ゝのゝ子れゝゝりまゝ大塚の古ゝ

ゝに番作のゝに腹ゝりの姉に

とゝゝの墓六とゝゝのゝゝゝ

ゝ聟とゝ父匠作の結城龍城

の子にゝゝ持氏の末子二寿王の再

び世にでゝ成氏公より恩賞と

ゝて村長とゝり繁昌をゝ番作

湯治をして金瘡をあかさんと又

諸所にゝび居ゝ間のゝゝのゝ

番作とゝゝゝゝ墓六を憎ひ

曲亭馬琴編次
柳川重信画

さまでも村長ふれば家富て安楽に
仁を番作は貧く甚だ過たるの変
とよろこぶ作者思へらく忠臣孝
子の名に恥ぢぬ者官もわび
且栄枯盛衰の理入乏の武
蔵の国の名家豊島左門の一族練馬
平左門の家臣の娘由緒正き也不幸
にして墓六の養子となり濱路とよ
の美貌にて貞実なる養母に
少も似ざりめ笹八るる智慮のある
て村雨丸の刀を盗み鎌倉殿へ献ら
せをするの人々其の外種々の物ぐさう
畧ぼ如しとぞ　番作自害七死
信乃八伯母の名笹に年ふる些笹実
の家に頃蔵といふ小者あり此人もと
伊豆の国北条の荘宮大川衛士則往
といふ者の一子子名荘之助とぞ
長禄三年十月朔日に生れつとそ
二編め五の巻三更終ふ

曲亭馬琴編次
柳川重信画

この巻のはじめ八信乃十二才の
ときなりしとう伯母なる人
物ぐさう頃蔵心を尽して信乃の為
より毘笹墓六が奸を告あと及び番
作の三年五月の法事の後信乃を墓
六の父子濱路とともに濱路とと
の二段目すく信乃の母手束ゲ拾ひ與
毎日西郎大の死骸を根に埋め公房
の梅の実に仁義礼智忠信孝悌の
文字わく八一一奇説それより手五
て文明九年信乃八十八才濱路八十六才
とのりて豊島氏く管領家の合戦
わりて文明九年四月十三日臣田植松千
葉の人々豊嶋煉馬の由勢とうがひ
江古田池袋にうち亡ひと成濱路八
頃く実の親兄弟の練馬にあつまく
愁ひ歎く心より信乃とちぎる心を

告んとするの情合あるハ同じ村さめ
擁助といへ盲唖なれど信乃とはいづれ
厚く其の死にのぞミて病ひの苦
痛を堪へつゝ身の素生をかたり一人の
実子玄吉といふの役成氏公の歩卒役
を勤むる人ありしがこれを嫁するこの玄
吉といふ小児ハ長禄三年十月皆安房
の國洲崎に出生す実の父ハ養親
もまさて是々といふ氏も系図も立
派ならぬ伏姫神の感得ありてや
後に犬飼見八と名乗り八犬士の一豪
傑なりさて濱路を妻にせんといふ陣代
簸上宮六がよろこぶまた又左母次郎と
いふものが暮六ツかとまで謀事せらる
神宮川にて信乃が秘蔵する村雨の
刀をすりかへ悪事信乃いこれを知らず
また村雨を成氏公へ献ずるつもりて古河へ
赴かれし其跡にて簸上宮六ハ濱路と婚
儀をなさんとする夜左母次郎ハ無体に濱路
をうばひ逃れる本郷圓塚山にて

左母次郎が村雨の太刀を三たび代せしを
聞殊に無法なる見ばて腹立すなるも
濱路が一念左母次郎を打たいして却て
これが為に殺されんとするその時忽ち口
々き風情着官奉を振ふ秘術場初
編より九編に至る作者の大功この巻
にいたらく衆人を感ぜしむ濱路が
信乃を慕ひ苦痛にあふ左母次郎が
殺されんとする其妙不思議莫道
人といふ少定の穴より宜出來二
郎と自ら濱路と兄妹のなのりなし
村雨の太刀をあづかる是より濱路が
亡の兄犬山道節忠与とて練馬の残党
天下の豪傑八犬士一人の英勇これに始
まる名玉出す山さき額蔵の荘助道郎
と戦ふのまうさるの奇遇文額蔵
簸上宮六が友立がひ時簸上宮六亀篠
蟇六が害にあひ右の主の仇を即時にむくひ
かくいはく疑ひなき無実の罪にあたる
さま牢屋につながる怨情さへ大塚

信乃は村雨の太刀をすつぱぬきて
ふりかぶるを吉我の御所ふかくもれ成氏
公をすつぱし処その太刀の倦くるふ
よりの疑ひをかなむ歌國のすハー者
あるんと既ふ命をもとなる難
儀とありもそきも聞届られねば
犬死をするもの多くの捕手を
はちしと十方へ追散す一人當千の力量
早業実ゆも故人番作が若君を
ハンを擒井の金蓮寺に勇とあるハ
その傳をこゝふわゝ女装で青ー信
乃の柔和をこれすゝ子すぐ大士中の
初筆にもゝ出る程もわりなる恩
をも曲亭翁の自然の妙作後ゝ看
官の眼にさまり錦繪ふ摺りて
祭礼の行燈額面にまで画き写し
吉我の御所の芳流閣にとゞまれ
が血戦をゝ伝の樣助の実子犬飼見
ハ言ふ道ふ信乃の捕ふふ閣上ハ登りて
両個の組打が第三編の大詰あり

曲亭主人編次
柳川重信画圖

滸我の城中芳流閣の屋上ゆく彼の
犬塚信乃ハ多くの組子を打破りて
憤怒ふる色の所へ犬飼見ハ冑
来ゞ互ひ武勇をあらそひ組
ふるまゝ坂東河の岸につるぎ小
舟の中へ両個ハ組ふる俄ふ落入り
ふ吉ハ流れ来ふ方をたゞ
成氏公の下知ふて新織帆太郎
りの工夫手の役とせりこゝふ下総国
飾郡行徳ふ古那屋文五兵衛と
ゝふの釣ふ出て小舟の流れ来ふて
ゝ者ゝ見ふ彼が口ゝ犬飼
見ゝとゝふ両個とも氣絶
ふ為ふ抱き見ハ
ゝ信乃ハ
文吉兵衛ふ素生をゝ
ゝ今まで死ゝ敵々ゝ

両士たちまち兄弟の義を結ばせ伏姫神
其の玉の奇縁古君屋文五兵衛が安房
の神餘の忠臣〜那古七郎の弟多吾と
りの因縁其子小文吾の長禄三年土
月の乳母それよりも以前の見八を兄弟
のよしを結びわりて大塚の糠助が見八
のいまご文吾とひ一節拾ひ出さんと
せ〜ちゝ足柴見兵衛が貴ひ文五兵衛
が方にあげ乳をのみ入と縁を考へ
児好ずを初編三編三編の因縁別貫に
ふたつ奇談連環なる文吾の嫁智房へいふの
猫ゆゑ小文吾の嫁智房へいふの
反目の苦身〜義にろく信乃の身代
とする奇妙の作意その間の金花大
浦〜大坊が念玉とゝ修羅場〜葉崎
十郎が子土郎とゝの者親得と号して
実〜犬士をゝ内意を里見家より
義と行徳の相模と住吉の一四房八の
削ぬ小文吾の嫁ぬ女が産る小夏後

の犬士親兵衛とゝの殺りまことの
大塚伏姫の神霊大八を出くふく
一條まことの五巻の文明十年月
二十日より説ぶ〜て四冊の中八回二十
二日の夜すでに〜ん〜の時刻八二十日
夕方より二十日の夜あけ一日二
夜の物ぶり〜ゝ同ド
さ世ぞとの五冊ゆゑと神祇教恋
無常ものがたりも
今の美談とゝ〜

里見八犬傳 第五編 全五巻

曲亭主人編次
柳川重信画
溪齋英泉画

大塚信乃古郷近くいとの額蔵
の無失ゆゑ〜れまを
とゝゆゑ法場にゐて荘助を救ふの
勇烈大軍を切ちし四犬士をれより
戸田川ゆゑ〜て再度の危難に即ち

力二尺八寸の二人の壮士大石が陣番
の兵士を打ちて犬士をすくひ取り
するの侠気すこぶる妙義山中の遠目
鏡をひらく荘助と大山道節の姿狀
視るゆ奇遇の糸口説ける是
より道節ハ村雨の太刀と貴人と偽
り定正をあらふ復仇の強気田
助文の遠謀によつて道節大軍
小手巻きすてゝ右うちに折く四犬士
の行合によつて大山ハのがれ四犬士と
ぐるまく犬ぐるの大戦犬士相合
て相模国西文の地蔵堂小道節荘
助首級をわりて暗試合上野の国
甘楽郡荒牧山の麓村に住音音
とゝの差女ゲ大山道節に縁ある
のゝのがれ其新手曳軍節の
天ゲ貞孝こゝ三人力二尺八寸の妻る
れのすぐく讀ゆる毎に因縁の浅
くぐる奇談古今の小説小説一名く
めぐる男戦秋の歎の場

を分る頭向荘助道節二度の出
會死くる者を陽仁現在の秘龍
せくこゝ生る作意陰鬼陽人ゲの
判ゲ生るその奇妙ゲ水甲
わるゝ犬山道節ゲ火夏の祥を
ま生ゲ恥る業多くて其秘書地
ゲ焼するゲ生る男ゲ
所為合図ゲ地火の火炎
て立登る煙ゲ
丈捕ゲ犬山道節犬川荘助犬飼見八
犬田文吾犬塚信乃の五犬ゲ寄手を
一刀ゲ水ゲ
ゲ白井の大軍桃村と押寄る大軍
見八ゲ松のゲ
色ゲ色ゲ高の兵を
するの勇威老女音音ゲの兵
平前名姥雪世四郎の二人ゲ大胆ゲる勇
ゲ甲ゲ二尺八寸の傷見の身

音音八長カヒ[illegible]五大安謙[illegible]
荒井山を落さんとする忠烈者ゴ兵
五大の勇士ハ[illegible]
量平郎の妻女[illegible]
の臣下ハ[illegible]武家[illegible]
うせぎ[illegible]六男三女一同ハ死[illegible]
梵村ハ[illegible]
巻を[illegible]

あわぐ[illegible]すぐ[illegible]初編[illegible]
巻毎佳境多[illegible]
五編ハ作者の為ハ苦心の場多く
三大士法場をわ[illegible]
敗ハ[illegible]石田川の危難道[illegible]
沢山ハ定正を討[illegible]
ひそのゆ[illegible]四大士ガ不意の
難戦さそ五の巻の[illegible]村ナ[illegible]巻中
軍談のごとき場のを[illegible]筆力の妙
ふ[illegible]く世話人情を尽さ[illegible]実に
曲亭自然の秀作[illegible]

里見八犬傳

第六輯 全六冊

曲亭主人編次
柳川重信画
溪齋英泉画

上野の国甘楽郡荒井山の麓[illegible]
五大士吉昇の城[illegible]城[illegible]再度合戦より
世四郎音音ガ必死の働き家に火を
うけて山林草野を焼拂ひ烟[illegible]
分[illegible]大士乱軍に身をかし
曳[illegible]単節ガ行方を追て小文吾
途中ハ野猪をうち殺すの強勇
他を助け宿[illegible]求め却て其身を
[illegible]船虫と[illegible]毒婦のなか
ハ火[illegible]を[illegible]石濱の城中に
奸臣馬加大記とい[illegible]ハ[illegible]
押込とな[illegible]月旦を過すと亦その
大記ガ悪計を[illegible]玉の奇特[illegible]
[illegible]舞[illegible]の為ハ[illegible]ハ打れ
難をすくふ奇談舞[illegible]の乙女[illegible]
[illegible]の実ハ大坂毛野胤智[illegible]

智勇兼備の美丈夫多く数の大敵を打取の美談小文吾毛野が[illegible]両子葉の城を退れ大河の甲陽てられて犬行方知れず八犬士の犬飼見八郎が仮住[illegible]

急付て教て其後すゝく哭さて[illegible]旅路のさすゝ下野の国真壁郡網[illegible]

といへる行きて庚申山の怪談をきてたゝ[illegible]

ぎ一犬士に仇せ一怪物小矢を射く怪ほ[illegible]

且山中の老犬村大角の父一角いの者[illegible]

の亡霊が逢奇怪のつも赤岩庚申[illegible]

山の話ハ古今にめづらしきかゆ[illegible]

殊に今あれ現前の仙境の勝地あり[illegible]

かゝその山の変化神通をつて一角[illegible]

を殺一怪物一角化て孝子を苦し[illegible]

すえむる残毒すこ角太郎の妻雛衣[illegible]

ゝ貞節犬飼見八一角の頼をうけく[illegible]

角太郎ところわ犬士の由来かうの犬村[illegible]

もとりの犬士の一人なることを發明する[illegible]

の一條犬村の玉玦持ゝ奇談此巻ハ[illegible]

殊さゝふ面白き新趣向の多かりけり

曲亭主人編次
柳川重信画

犬の巻ハ犬飼現八ハ下野国安蘇郡返璧の白屋ゆく犬村角太郎礼度と文武の道を論ト居ふさとろ〳〵繼母船虫とゆ女角太郎の離別せ一妻雛衣とゆりのをつ是求りて角太郎ゆ利害を解て宅ゆ入ざる奸計をちめとし現八をこゝを出て船虫ゆ[illegible]思ひ角太郎のくゆ[illegible]さゝ〳〵と一角の方へゆう多く[illegible]の門弟叡法ところ[illegible]打倒して男成とゆ[illegible]入くまゝく多くの一人等ゆ害を[illegible]るさんとさるをかゆ[illegible]と是ゆ[illegible]猶供の夫光をそ[illegible]て角太郎の家にかゝるうんすと

一角船虫八角太郎の方へいろ〻
親の威光をかりておさけをくも
雛衣小自殺をさせ胎内の赤子を
とけく来るみさんとする非道の
えんくつ雛衣自殺の疵口より彼昊
玉の飛出て一角をうちたをし終に二
犬士偽一角の猫を退治する奇談
きく毒婦船虫が竜山の逸東太と
いの者とゝろ縄目を退きざるの婦
計をそ犬飼現八が信勇まことに古
今の傳記ゆゑ第一の巻より第三の巻ゆゑ美談
多く第一の巻より第三の巻ゆゑ
扨て犬村の段を説けば第四の
巻八犬塚信乃が諸国をめぐり
甲州巨摩郡富野穴山とゝ所にて
鉄炮ゆゑ災より武田の家臣
泡雪奈四郎とゝ人のを打まる
武勇とゝ共同国猿石の村長木
工作とゝ人の来り奈四郎と信乃
とゝ人めてあり信乃を伴ひ

その家に伴ふをもく此木工作の
家八信乃ゆゑあるのをゝ
木工作の母ゝ娘濱路とゝ人を
里見家の息女五の君とゝ人を
いとくきさゝ在せとゝ人る鷲
の為にさゝ人まて此国の山中に
おくさまそれより木工作ゆゑ
れのくふ〻の因縁まて信乃が
ひみづけの亡妻濱路の夫ゆゑ
また信乃ゆゑ恋情を告んと五の君
の濱路姫の身をかりて奇談まて
木工作の妻夏引とゝ人る婦奈四
郎と密通してゆゑ信乃と濱
路をありぞけんとする悪ごゝろ
木工作をとゝ信乃を罪ゆゑも
もろ〻と信乃をすゝ無実の罪ゆ
て武田家へゝ人へられゝ所に
甘利兵衛尉元とゝ人る眼代役ゆ犬
山道郎とゝ人をもて信乃を庫の内
より出し濱路を連く退くその後一

誠の天元来りて家内見分の一條
まこと武田信昌の明君なるを以て同国
石和指月院とぞ和尚、大和尚偉
道郎の對面もて仁德もぞ善
悪の政事もあるものなり
いろ〳〵尽くしてかりろ〳〵此段は第四
のまきとう第七の巻の八丁目ゆく
説然るに大田小文吾は伊豆の船
路は難風まりて鳴々に年をかつて
ゆくもく浪花のいろまで北陸道に
くだり越后の州苅羽郡小千谷の
里に旅寝して同国古志郡二十村の
闘牛の神事を見物もこの闘牛越
後の国ゆえ実に名高き一奇事
角觝の古実はいろまでも和漢の古事をひら
まく〳〵いざさとたれが倒のけろ
あのぐろと同じくろぐも看官の為
ゆも益多くよむは隨いて佳境ま
もく〳〵〳〵

里見八犬傳　第八輯　全十卷

曲亭主人編次
柳川重信画

大田小文吾が越路ゆく牛合の場にて
太刀弘頭八郎と彼毒婦船虫の賊
を所業さて猶偽詐をかりて小
文吾をさて殺さんとあるを捕られ土地
定めのもとと古き庚申堂にいきて
こと大川荘助なるものこれ殺
ひ賊の隠れ家にいろまで船虫事
う尽く賊の頭酒顛こいろのの小
文吾が逗留ろ石亀屋次郎太夜
打ちすの悪行かくく小文吾荘助が
皆殺しふ乳ホ大田大川の一事う
領主に訴へ毒婦人の為に死を
かまり老臣の計にいろく命を
するに東使二人士の供首をのそ
旅中大坂毛野に引合せるのの
ホ毛野と引合せるのの大坂軍
勇ふとすまく二人士ホ刎と大村大

川上住可原の賊ありとうとぶ人を
殺す命ふ巫女の大変蓋ひ
無尖の難賢女のなすけのその場を
のがれ上住河内の大山尖塚めもわひ
盗賊の本人を捕へ無尖の罪の證を
えんとて穂北の郷士永垣親子と
戦ひそこなひて賢士のかもとを
初めまこと八カ八月十五日
且親子大士の味方となるの美談
ハ大法師林布のまこと穴をたづひ
浄め一郷の害を除くの奇事湯
島の社頭ふオ子薬師うやまく
五十ヶ城の抜密をとけ仇を打
する大義すべくこの巻ハ大坂毛野が
ゆふまりて美談多く亦その際に
いろいろ船虫が司馬浦ふ刑せらるく
悪報毛野とくわかりて大士司馬
濱ふつぶ山軍議をこらして密に毛野を
まくんに大士五十ヶの城をまんとするふ
いろり毛野仇討の場也巻ハ左む

里見八犬傳

第九輯 上帙六巻

曲亭主人編次
二世柳川重信画

この巻ハ文明十五年卯月廿日の明ざ
ふ大坂毛野潜智ふの仇竜遠東太
緑連を打ちたりそ武蔵の国豆川ふる
鉢ヶ森ふ戦を初めて五十子の城兵
ちりも小田原の使ふれば敵重ふ備え
わりをもとも恐ふまぐ只一人数人を切破
つて終ふ本意ふ達るその血戦
りとまもとばそ危き川情眼前ふ
只ふ如く珠ふ大坂只一人を東西よ
ア文合ふ打ちるべき敵のこと配り既
ゆとりふ難戦のをりふ毛野ハ仇
猶ちぐ知りけ二人の助太カ西のく
るふ大田ハ文五東の路より兵仕助
名のアかりて打ち出ふるさも目ざ
ましき敵計ヶ法筆力自然十方
ふ散富ーて段々ーまりくるく文
墨ふ利益の徳わるごとし亦

谷山の伏勢仁田山晋五を打て其の
馬をうばひの働らき敗軍の注進を
聞て扇谷定正五十子の城より加勢
ふ出馬せ忠臣河鯉守之これを諫て
後ふ自害ぬ定正諫をきかずして三百
余人を品川ふ操出し大角見八犬村大
角太山道節の三犬士が徳北の兵を
ふ伏勢となりくるふ切そらし剰さへ定
犬山ふ兜を射おとされてさんざんふ敗軍
なせ河鯉孝嗣ふすくはれてあやうき死
を生て犬塚信乃ハ二千余人の小勢を以
て五十子の城を焼打して来取倉庫
をひらき金銀米粟をことごとく城
下の村民ふ施し徳をわらハせて再度
五十子を立まの信義などを古今ふ
すれざる美談すくなからず多くし且河
鯉孝嗣犬士と一古戦して勇威を落
さずそれより犬士古川をこあげく舟
路の退口ふ一言の挨拶せるなく
古より軍記の文段なまやさしからず

多かれ似るべくもあらず此八犬傳の
ごとく至て精くせし修羅場のつねもた
絶てなし江湖の軍談師なども是非をも
よそて舌耕の助となすべしされど定正
が愚ふして忠臣を疑ひ国家を保ちう
ざる段などハ更に実録のうすけるゝん
犬士穂北の郷士の家だに置れて結城に
旅ざち安房ふハ義実隠居せられて
義成里見の二代とあらざるものその
段などハ過しかども今しく伝ずして
看官のこゝろふ益多く長編ふして
よくあやまりなからふあらずハ或ハ
をも解てめしやせし小事すれども或
上総の国夷灊郡館山の城主ふてあれ
蟇田権頭素藤といふ者の素生
まさその者がまづふ鬼語をきゝて
一城の主となりし奇談さてふ八百比丘
尼といふあやしき尼の出来て素藤
の悪総をたすけ里見家の姫君妻
ふなさんといふ一條よりあかりごと

りつく里見の若君をうぶ人質さつく非道の合戰をいし
を人質さつく里見義成をづつ[illegible]の[illegible]
の神夫神通をあつ[illegible]遠く義成を
さてさるく奇事なり義実八伏
姫のヨ太をすつんとてかの姫の臨
終長禄元年ちう二十有余年の後
をたゞめて富山へのぶこの頃安房上
総の二州ちとぐくをたゞくく滝田の
領分ちとの八伏姫神夫の在ーまく富
山るまゞ申断せーまつりふ主従
三人山深くへのぶきく麻呂安
西の残黨こもまわ起ちて
既に義實朝臣あらうく見へくる
所へるづりの少年犬江新平ーこ一
人わ〳〵ふまくく悪漢どもを叱りこち
まて突立わりさ負憤然とーく
いさ〳〵ふきく童ぜるのさー画紙
りつくこの六冊めのひすぐと
なーくり

里見八犬傳　第九輯　中帙七卷

曲亭翁編次
柳川重信画

この巻ハ上帙の[illegible]
大江親兵衛ぶ伏姫の神夫加護の依
てるづりの九オの童ーとりとどの才
力稀代の使きのとゞ敵の忍ち感
代ーこ里見にをぐ公市姫雪与四郎
その妻音音その嫁[illegible]る畢郎も
ちまくく富山神夫の宜敢ゆよりそ同
居ろ殊ふ力二尺八の腮を二ちとの
ふ生生せー奇談をとう大江が
まとてゆふ義実の免ーせるて館山
ふ使者をたとめ勇威明井ー以く
城主ををこ[illegible]の城主素藤
を生捕館山を平定ー義成仁心あ
て進賊を免ー素藤追放せーこと
て山路ふ入女僧妙清ふ更曾ーこ
その菴ふ住女僧とりくどの出前ち
ハ次果ーとりこぎ夫ーこ色香ふ愛

て情を通ず淫楽をほしゝその後妙
精の奇術濱路姫をとゝはゞ義成
を迷ひ大江を逐さの事藤館を
夜打て里見勢を追出し再び城主
となり妙精さのゝ悪
勢こゝを責て敗軍す一の中央
妙精がさるぐつの所為をうて濱路姫
を盗出し途中のて伏姫の神夫に
ちりかされ且肝を喰られてうち邪術
おとろく義成後悔して大江をめ
かさんとする條親兵衛は武蔵の国
ふいくり上野の原の茶店ゑ河鯉
佐太郎が忠孝のゝ大坂毛野が
鈴の森の仇討その外大江の噂ばなし
かゞ河鯉氏の無失の罪を赦まし其
狐化して腹の刀自となり河鯉を救ふ
の妙術大江河鯉を
つゝ殺し途中の屋ふるの
らくこの九輯中快文春の尾こゝろ
ゝも巻毎新奇妙談ばかり

里見八犬傳

第九輯 下帙上五冊

曲亭主人編次
柳川重信画

犬江親兵衛河鯉佐太郎戰を止めて
両人の名号合再度茶店ゑいくて
あれ互に身の上をかたることゑ茶店の
婆が面影腹の刀自の自れ似たるより
かゞ婆ゝの河鯉氏の母に命を救れ
るゝ狐なりそその後に乳母と化して佐
太郎を母ゝ奇談政木狐とゝ
名より神通力ゑそ安房のことを
ゝ犬江ゑ安房のゝ頭ゝ政
木の老狐ハ不忍の池ゑ入龍と化し
昇天ゝそその神器高国河原ゑ大江河
鯉責其を視て大士に困みゝる次
團太ゑ名号ゝの奇遇里人の舌妨
をうゝこゝして味方をゝのゝ
ゝ河鯉氏名を改めて政木大全と
ゝり後年里見家の名臣といを
ゝ役功ゝゝ延崎士郎に會て

上総ゐ渡海し再度館山の城を攻め
勇ましくもやぶりすてゝ素藤を生
捕て妙椿狸を亡ぼしたるもの
この妙椿とゝム妖女僧ハそのもとハ
房の犬ゐ乳をわく育る狸なり
ことりつとも大ハ菩提をひゝく怨念
をたゞ狸ハ玉梓の餘怨なゞ消ぎ
里見に崇るゝ因果初編のたゝり
ゐ過しようこゝゐいくゝて曰きゝるら
さゞ誠にふしぎの物作といふべし
さて義成の仁政館山の民ど賑し
素藤を誅して功臣をその父
江ハ大攻を他人ゐゆづりて結城に
ゐむくかの地におゐてハ大和尚
大士とりゐ里見季基の重臣
をたゞめ古戦忠功の臣をまゝる
その法場ゐ火ひの一大事をとり
来りて七大士の危難にあたゝび嘉
吉のむしを思ひ出を結城法華経
さゝゐ修羅の備えゞ春尾ゐり

里見八犬傳

曲亭主人編次
柳川重信画

此春の義烈院殿里見季基の追善
結城の古戦場へ大庵の法事と称
して逸巡寺の住持徳用とゝ悪僧
同志相ゐをゝさる結城の家臣長城
枕之助惣利堅名衆司経枝根生
野飛雅太素頼ゐどゝいふ者をかさ
らひまゝ徳用の弟子ゐる堅削ゐへど
九て三百五十四人三名ゐをゝ
場をせめんとゝのゝ七大士ハ敵
をとりて二ヶ所ゐ引ゐ道節大角
毛野ハ大庵ゐ残り荘助小文吾
現ハ林の中に伏し信乃ハ蜑崎氏
とゝ大法師を守護して立退六犬士ハ
敵を生捕て退口ようとゝゐ信乃ハ
途中ゐ大敵とゝのぞひ左右川の辺
ゐて徳用とたゝふ最中大法師と
蜑崎氏ハ強勇の惣利ゞ大事にゝこ

まれ既ふ危きその所へ犬江親兵衛仁ゞ来かゝりて勿ち大敵をきり
やぶるされどもこの時仁ゞ同一くるる
政木高嗣石電屋次團太郎三の三
人と伏勢の鉄炮ゆそりとそ
八犬士ふそゆて相揃ひ大と蛮
崎氏とを抱して六道山能化院教主
るしのふ荒寺に休息し仁城の追手
とまろ所城内の伝者小山大夫の次郎
朝重とふものきこうて諸犬士に無礼
をコびそ無事をとろこふそのむし
嘉吉元年七月廿四日ふ地蔵尊を建
立して里見季基の菩提吊らひさる
爭西坊俗性十八とふものの忠義孝子
栄西法師の孝心あゝ仏の伏姫の夫神
風を妙して難をとゝ将車地蔵の
灵効ゆて犬士の難を救度もまゝ
さる神通力六道山ハ結城七郎朝光の
建立せ一ゆそ下の其ときもゆ
因縁奇談巻ふそろへいとく入組

ゝる前後の分解実ふその場を眼
前ふ着ゞていう尺せ一例の地文
ゝゝゝゝ長編の奇作芳賞ゝの人
を一さそ犬士ふそその情願をとゝし
ゝの安房の国へいう稲村黄田両城へ
ゝ里見両君目見して君臣上下
数十年の本意をそゞる めでたく全延
美談多ゝ少ハ畧して
さそそれゝ八犬士の本生と金鞠氏
ふるさんとて大法師と評議ゝ
ゝゝゝの犬ハ宝ゆゝれ京都将軍
義尚公へ使せ来ちるの一條その間
ゝハ白濱の魚量山延命寺ふ季
基の送棺をとゝ法延寺
妙直ハ由子一節ゞ犬士親兵衛と
の再會ゝ七全も新古のまゝ
対面ふゝろこハ一きゝ多ゝ
て親兵衛ハ都のゝりの大役をとゝ
つけゝを蛍寺照文と船路をとゝ
三ゝの国寺子寺とゝ湊ふ風待て

海賊の難ありそのあと大変商人
とりて立る海竜王修羅五郎とよ
海賊の頭と水中の難戦姫雪代
四郎の水練によりてあやうきをのが
身照文八陸あおいて海賊の首領
今純友査甚太といふものと大戦
し既に必死とおもひしところへ三河
のくに奥郡の城主藤尾判官伊
近の賊を制する軍兵の加勢ふ
よりく功をたてそのそまてう都へのぼ
りて曾領政元へ祈ひ将軍に金
銀をたてまつり且金碗性のことを
天子に奏聞し首尾よく安房へ
かへりんとせしに犬江親兵衛
在厄難漢志まと許さる西長
盧五関とりふ句にいさりて巷を
おさむえやく次編を
よくまつべし

時代物の部

小野小町一代記　全六冊

安倍仲麿輪廻物語　全五冊

安倍仲麿入唐しその奇談をかたり

繪本菅原實記　前後十一冊

繪本玉藻談　全五冊

玉山先生の画作なる三国
の人物をもくくその赴を尽されたり

繪本三國妖婦傳　三編揃十五冊

前書に同じうかれども玉藻前をふた
いりていとこの物がたりをかくとすべし

奇談怪談の部

英草紙　全五冊

繁々夜話　全五冊

秀句冊　全五冊

怪伽ぞうし　全十冊

こまゝ奇談怪ごんの種本ども
いとべきものぐさ古今の珍説を
多くあつめたり

遠山奇談　全八冊

小夜あらし　全五冊

奇談怪談の実説を編輯したる
紙わく古今にわたる書とゝのべし

兎月物語　全五冊

一二草　全五冊

風草紙　全五冊

この類ひの物がたりハ数百部あり
しかるに記したくさとびこづかふ
其中の佳作を考へて出せり

著作堂一席話　近刻

曲亭馬琴翁七十余歳の長壽
まして五十年来見聞せし奇談
珍説まで古今未発の高論を
ど戒引くあつめ唯一席の物がたり
こゝ人どもいと面白くこれはでいづ
の草紙ゆゑ似ずね新奇妙談ゝ
いとも新しくこれ
著作堂の柏堂翁
を待もよびかんか

北越奇談　全六冊

越後雪譜　前後　全六冊

この書は北越冬春のあひだ雪中の奇観をつゞり天山名所を視て誠にありふさの珍書なり

山東翁柏樹著

繪入読本　田家茶話　全本五巻

大藏永常集

もゝく此書は忠臣孝子義夫節婦の事の上せ初として古今の奇談を数百ケ條あつめ、どく只命屈ふ異見物ぐるふあるとく眠気を催ふまを色おぼぐ〜く眠気を催ふまを色おぼぐ〜く飽て考まと文章とをくあく飽て考せ讀ん在るくれば実ふ田家の俚言ふ分をく聞きを記せるを第一と子ぐも気ふまをらく分解べ両の見

法もぐ〜とうぐさの頼てきうせのふ
その所ハかりろ況ふめでおのづ〜
俳諧すめてそもろ〜と改ぜぐ〜
お伽のこま紙ともふ半くるものハなし
さまべとて戯作のめぐりふわざれば
えもとぐさもるは其ゆへ教引とかる
るやとをく殊ふ近年の実録人の
見聞せまをくるをそ今しく平て
者されがぐまの席ゆそ色ゆふせ
ちづ〜ろも聽流ふろとそれ信せ
らまく茶のくむ色の上坐とるべ
わるふハ車洗のえけて落〜坐とせち
ぬく方々ハまをうへてその益まくも
賊とるうまぐ一因ふ好まくはとふ
寄代の実録とりべ〜

高僧傳の類

釋尊御一代圖會
北齊老人為一画図

聖德太子傳圖會 六冊

日蓮御一生記圖會 前後十二卷
上人

高祖大上人の御一代の事跡を諸書にのせ系圖をはじめて改正一御行狀を圖會とわかつ一てい寸一の御其雜を目前に拜せしめ一ぐ一ごゝく古圖をもつて丹誠を加へうさまが宗祖の御傳世に多し

とゝくよりこれを拜せバ唱題宗旨の人々我慢の扁屈をいたゞくこゝろく信心のまこと成りて拜覽わるべきものなり

喜多川寛雪画圖

繪本一休譚　前十二卷後
中將姫一代記　全五冊
熊谷蓮生一代記　全七冊
弘法大師御傳記　全五冊
圓光大師御傳記　全六冊
釋迦八相記　全五冊
日蓮上人御傳記　全五冊
親鸞上人繪詞傳　全三冊
西行法師一代記　全六冊
北四輩順拜圖繪　玉山筆　全十冊

諸大人隨筆之部

今昔物語　宇治納言源隆国卿著
宇治拾遺物語
古今著聞集　全二十卷
集義和書　熊沢了海著
集義外書　同　著
駿臺雜話　鳩巣先生著　全五卷
西行撰集抄　全六卷
閑田耕筆　全五卷
閑田次筆　全五卷

閑田文草

閑田詠草

近世奇人傳　全五巻

續奇人傳　全五巻

爲人抄　全五冊

東遊記　橘南濱著　前後十巻

西遊記　同　著　前後十巻

北窓瑣談　同　作　前後八冊

筆行脚　新井白蛾作　全四巻

猿著聞集　八嶋定岡作　全四巻

新著聞集　全六巻

雲根志　本門小繁著　三編揃十五巻

簑笠雨談　馬琴作　全三巻

近世奇跡考　京傳著　全五冊

燕石雜志　馬琴作　全六冊

骨董集　京傳作　前後六巻

三編より五編まで追刻出来

そもそも京傳先生ハ戯作者中興の元祖ハ一代の著述ハ其中ハ書ハ分別して好古の風雅を奇妙談ゑ古の貨幣を素その時代を眼前ふ見るごとし

芳窓漫録　全三冊

思齋漫録

橘菴漫筆　前後十巻

梅園雑話　合二巻冊

尚古むさみ　全二冊

伊豆日記

七嶋日記

閑窓筆記　全二冊

俳家奇人譚　前後六冊

萍花漫録　全

擁書漫筆　高田友清著　全四巻

松の屋大人の隨筆はその風高く俗まゝ遠き書ぶりなれども
よゝくこゝをよむ時はまゝ一際
おりゝくの書とりめべし

棟梁集　同著　全二冊

相馬日記　同著　全四冊

富士根元記　同著　全二冊

萍のゆく　全二冊

こゝ近江うゝ東び旅寐せ博学の阿闍梨ゲ著ゝる隨筆ゆく
その文ぎうずゝんものびゝる風
調高さかりむきゝ隨筆の
るふゝしい紙一ゝるべし

梧窓漫筆　前後四巻　太田錦城先生著

梧波教諭　同　前後四巻　著

むぎとげし　瀬川如皐作　全二冊

花街漫録　全二冊

雑交記　馬琴著　全二冊

狂歌奇人譚　全六冊

廣益俗説辨　全北五冊

還魂紙料　柳亭種彦著　全二冊

玄同放言　前後六巻　第三編出来　曲亭大人著編

この名ゑ地人先生の隨筆あるべし　自然博賢の珍説多く　和漢の先哲も解ざる書籍の注釈ゑど　丹誠有益のものの多し　山書城　諸君いのよく　著作堂の号　ときとして　翁の博文強記をあらべし

近代世事談　全五冊　誹林沾涼著

この書は東山殿よりこのかた呉服食　菜草木器財　近代船未の年暦其　外書画詩哥連俳旋塾雑伎ふ　いくるまで何いろのいろう初まりし　といふまで紙ムラ〳〵　挙くるべし机右に　ちきそ殊更に珍重の書なるべし

同二編　三編　各五冊々　近刻

太平樂皇國性質　全二冊　木公亭金水著

この書は儒者と佛者の説の異なる　ところを論じ始めとして古今風俗の　変化あるべし神社ふ鄙口をひらくと

誤るとゝふ説或ハ世ぞんど山
鯨まくら三味線琴の音の豪富
貧士を侮る紀夫帰喧華や囲
女わらひへ刺墨江戸の方言あ
外拳てらべ〳〵何〳〵とゝく
雅俗のまゝに説をつけさる珍書を
むそもく書を用ひて教訓と
あるまゝも多くまるぞ求めて
視るべし

周武王軍談　全五巻
縮文畧解画鈔

殷の紂王位にのぞみてより悪行
をなす一婦ふみ〳〵三酒ふるをれ姐己
といふ美人を寵愛して忠臣を殺
し美人をとるやまたてふ武王太
公望と云ふ謀つて天下のうゝを紂
王と作し終ハ殷の天子六代にいくり
年を経六百四十余年にして国を
ちゝめ周の代となりて八百年の基を
ひらくそれより九五代ゆ周の景王
までのことなり

漢楚軍談　前後　全十巻
曲亭馬琴略文

周の代亡びて秦の始皇即位の後阿
房宮とゝふ廣大の玉殿を建て三千

人の美女と日夜婬酒ふけりて悪
人趙高を愛し儒者を穴ふうばめ書物を焼すて
その外種々の悪行ありしかば沙丘とい
ところふ崩じ二世皇帝位を即て
天下大いに乱れ六国の子孫ちりくふ
雄をあげ国を起さんとす中ふも劉
邦という人芒碭山の白蛇を切て衆
人を従ぐ張良という軍法の奇師
と味方にせんとす項羽と天下を
そなへ終ふ項羽を亡して漢家四百
余年の基をひらくことを高祖皇
帝という漢楚二十余年のあいだ争
戦あていとうぶくしてあるを馬琴
子の筆意を略文ぶくしてぶく
くちの本ちをうしなはざる古今
奇代の絶人の小傳成べし 價
もやすく諸国の人乃家づとふ
まことふよろしきを品といふべし

繪本通俗三國志 十一編 十冊

葛飾戴斗画
次編追々出来

漢の高祖より二百年にして王莽と
いふ者国家を奪ひ一旦漢の世ほろ
びぬるとなりしかば西漢とふの比
劉秀という人出て漢の世を再興し
て光武皇帝と称し四百年の基
行を起せしを東漢とふべく此
後漢の十二代霊帝のときふ至つて
政事乱れ黄巾の賊おこりて都を
責んとせしその頃都ふ董卓と
いふ者天子の内宮十常侍の悪人
と殺して天下の権威をなしく天
子なきがごとくなりゆき大臣王允これ
を憂ひ貂蟬という美人をもつて
董卓を亡ぼし世を治めんとするふ
其残党李傕郭汜再び王允を
打て長安を乱さんとす曹操い
かでも大軍

献帝を守護すると公を以て恣にして
権をふるふ孫策といふ人分周
瑜曾粛などいふ名臣よりつ
どを以すりけて江南の地をひらき
まさ劉備玄徳といふ人い甚多いろ
て貧しかりしが関羽張飛といふ豪傑
傑と桃園の義をむすび艱難辛
苦して後に荆州に居をかまへる物
ごとりその中へ関羽の英男夫人を
しまけて五関やぶりの威風十里を
独歩しまさ玄徳ハ臥竜孔明を味
方にるさんと三度草庵をたづね孔明ハ居る
雪風の寒さ骨にとをしたれ孔明ハ居る
ぐ〜天下の三分を定めてこれ以来さ
ぐ〜趙雲長坂坡に勇をふるひて
多く主をもとひ張飛が大音曹
操の百万騎を摘の上へ吹分て
走らしめ孔明呉の国はいろうて
大論しをかふ周瑜と合体して
三江ハ大軍をとのさせ連環のそな

アとゞめ曹操の舟ハ焼れぎる
せるめ孔明ハ七星壇に
東南の風をいのり八十三万の魏兵を
赤壁に焼すて関羽義にうつ〜曹
操をとらさゞ孔明趙雲に錦囊の
謀をさづけて呉の国へ玄徳をすく
ひ周瑜をもて死せしめて四郡を暮
盛にるして蜀の国をとりて位に
坐し照烈皇帝と称を東漢い
十四代百九十五年ゆゑ曹操の
子曹丕のゆゑ天ぬ位をうばれり
呉魏蜀の三国とるとこゞへみ
威をわそひ止事ありて紀
玄徳の仁政孔明の奇謀千載
ゆゑひ法さへとをさひ天下の
善悪ちのづくゆゑ顕明なり且この
繪本い前版のゆゑやまりを平して
彫刻のつとも念を入れ重
ふゆして珍重深くべし

繪本西遊記　初編十卷　二編同　三編同　四編同

全本四十卷ありて満尾

いにしへ人の意馬心猿のたとへ説出せる奇代の妙作三蔵法師孫行者と八戒沙神の徒弟神猿をもとめ外に八戒沙神の徒弟を半ばは西天へ往文をもとめんとする山川の里の堪難辛苦異類異形の妖魔と退治し孫呉空の神通力にも及ばざる化物出く三蔵法師を苦しめる節あり孫行者の神通金斗雲にのりて東海めぐり観世音菩薩の寄詰珍説多く数千里の山海を経て終に天竺に世一代の用ふべきえる教訓なり

水滸画傳　初編　二編　十卷

曲亭馬琴譯

葛飾北齋画

もく水滸伝小説中第一の妙作なりとかつて人の評せしもの尤なり馬琴先生の筆削せれくまで水滸伝注解和歌の中はこれこの画本を第一とすべし

水滸画傳　三編　五冊

高井蘭山補

北齋為一画

四編　五冊

五編　五冊

六編　五冊

七編　五冊

抑もく次刻して白面ともくく全本とあくまで着官も精覽わるく販元小丹誠の功を遂寄のくとい

繪本國性爺忠義傳　前後二十三巻

豊臣太閤朝鮮を征伐とりの大明国ハ韃靼といふ夷の国と戰ひ北の方危く難渋なりしが其後和朝の軍兵ハ引わけて三年過ぬの大明ハよく計る萬暦帝酒色ふ溺しく政事をうしなひ崇禎帝位を次て国ハさらも安きこと能ふ於て李自成といふ者陝西の地ふ起ふ乱る殊ふ宋孩子といふ軍士ハ謀をもちひ明軍を打やぶり賊兵さびとなる長く飢饉をまねきひと称しく官米を出し諸国の飢をたすけ人ふ威をふるひ大軍をもつて都ふせめ登り竟ふ天子を亡し李自成一且国王となる大明といふ国ハ十七代ふして亡びなりたれども三百八十年ゆ

呉三桂といふる忠臣の大名韃靼の軍勢をかりて李国王の賊兵をやぶり国の仇をはらすとの時韃靼の大将明国の敵ふ乗じて明の都をとりたるそもそもより明の子孫仏光帝立ち鄭之龍といふる者を大将とせり清軍韃靼を破りて期の宝をうばひけんとす清軍さまたげも大明の代絶ふ

昔明帝始終全くなく武帝位を継ぎ分一を保ちぐーとの子鄭森といふ人の日本長崎ふ生まるふいてまども帝とまふすところ

福びて彼の国ハ父の鄭之龍日本国ハ母の血脉とて勇猛武略敵すくなく志もいく清の大軍とやぶりて明の国風元ふ返ー国ふ引めんと

もどりて再度[illegible]ふ[illegible]んを[illegible]
[illegible]ども鄭森ふ国民の父[illegible]とよ
称[illegible]ところより「国性爺」と称ひしの
のち永[illegible]帝を[illegible]立て亜輝爺を
よぶ豪傑[illegible]ふ南洋嶋[illegible]
[illegible]り安海城[illegible]泉[illegible]
大功[illegible]とも明国の運[illegible]
[illegible]ども万事[illegible]人ふ任せむ大
寇といふ比ふ[illegible]て病死[illegible]
[illegible]ども清軍その地を責[illegible]て
[illegible]国性爺より三代目ふいさ
いく和睦ふ[illegible]ども忠義の[illegible]来
代ふ[illegible]日本国へ加
勢[illegible]和軍を偽く清兵を
唐土に[illegible]朝鮮正伐[illegible]
して和朝と[illegible]日本出[illegible]の国性
爺[illegible]

美談[illegible]

琉球軍記　全十巻

清俗奇聞　全六巻

大明国亡びのち當時の清朝の風俗[illegible]書なり

唐土名勝圖會　全六巻

漢朝へ[illegible]ども猶[illegible]く彼地の[illegible]眼前[illegible]

通俗俳聞録　前後十二巻　六樹園大入譯　渓齋英泉画

唐土の公事明断奇談をあつめ誠に珍説とふ書なり

繪入外題鑑 後編

中本の部 一冊

讀本

古今近来児童幼の愛翫の人中形本の外題をとりあつめ集めその本の出たるとわかち記しそのもとめ出たるかたの便とけだしべ人情のこのみ好みせのかたの便とるもとめ多くもとめて一目の清らかなるべしとを思ひ出して樂しみとなるべしかるに本の外題をもえらぶ所に甚だ知りえ求めもとめの調法のもとめ以前ふるきれくるをもて他人ふるきもとめらくの記臆となりわるひかるべきの種本ともなるべし中ほ本れて著作し拾遺残編餘興のたとへ我冊つぎ何さらのもとめのこのその数多くはべらもとして本屋へ出せしの部のたりとなりて遠国他国の人方より販元へ出用せば書のたまもとの者官へ及ぶ貴本貸本の人方まへなくてかるべ懐中の小せまきもとの見せ出せの土人のもとの覚本なるべるべ出所もわるさなりのもとり

寶政年中ころ天保ころまで江戸戲作者画工の名目その大略をあらん

作者　山東菴京傳
、式亭三馬
、立川焉馬
、振鷺亭主人
、咸和亭鬼武
、十返舍一九
、小枝繁
右ハとりぐ〳〵数人とある事

作者　曲亭馬琴
、爲永春水
、松亭金水
、墨川亭雪麿
、瀧亭鯉丈
、花笠文京
、文亭綾綺
、山東京山
、柳亭種彦
右ハ当時とりぐ〳〵流行の先生なり

この外二代目の人々まさに風のうつし大人まさに門弟の名目ハ後編ト記すべしの末にうつり〳〵出ん

浮世畫師　歌川豐春
、歌川豐國
、歌川豐廣
、歌川國安
、歌川國九
、歌川豐清
、柳川重信
右ハうづまも名人の画先生なり惜べし〳〵故人となる事なり

浮世畫師　葛飾爲一老人
、歌川國貞
、蹄齋北馬
、柳川重信　二世
、歌川國芳
、歌川國直
、溪齋英泉
当時のうづまも流行の要人

[illegible]

東都撰者
文溪堂
岡田琴秀著述

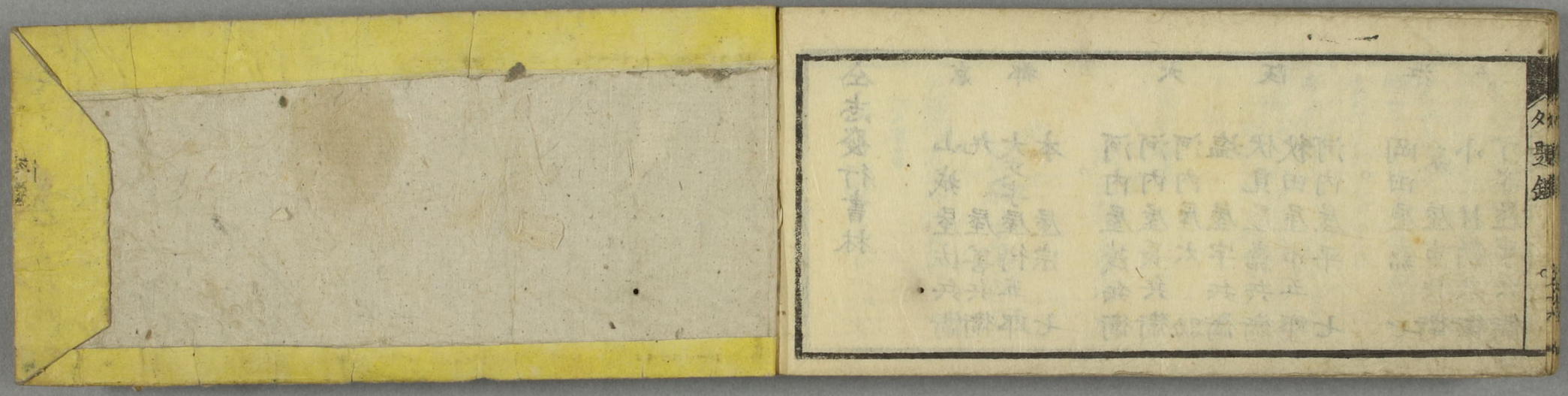
教訓亭
鷦鷯貞高補正

天保九戊戌年仲秋發行
江戸備書

松亭主人金水淨書

仝志發行書林

京都
山城屋佐兵衛
丸屋善兵衛
大文字屋得五郎
本屋宗七

大阪
河内屋茂兵衛
河内屋長兵衛
河内屋太助
塩屋宇兵衛
伏見屋嘉兵衛
秋田屋市五郎
河内屋平七

江戸
岡田屋嘉七
泉屋市兵衛
小林新兵衛
丁子屋平兵衛